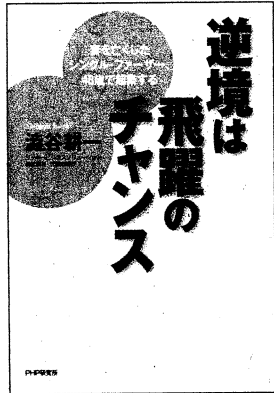


日本人の実に美しい生き方



評・安倍晋三

(元首相)

本書には著者のシングルファーザーとして、また48歳からスタートした起業家としての

波乱に満ちた半生が余すところなく描かれている。そのドラマのようなエピソードの連続に、ページを繰る手が止まらなくなるほどだ。そして読み終えた時、タイトルの意味が気持ちの中にストンと落ちる。ここには日本人として実に美しい生き方がある。

著者にとって、もっとも大きな逆境は最愛の妻を乳がんで亡くしたということだ。あとには高校生の長男、高校受験直前の次男（なんと母を亡くした12時間後に受験があったという）、小学3年生の末娘が残された。当時、著者は日本興業銀行に勤める銀行マンとして多忙な日々を送っていたので、子育てと仕事の両立は望むべくもない。

こういう時、父親はどのような決断と行動を起すだろうか。恐らくさまざまな選択

肢がある中、著者はもっとも難しく、過酷な道を選んだ。

銀行という安定した職場を去り、48歳という年齢で起業したのである。好きな仕事でキャリアを築き、子育ても自らの手でやる。その決意は素晴らしいが、現実には厳しい。昼夜をおかず仕事に邁進するかわら、塾の送り迎えや娘の弁当作りの様子なども描かれ、父子家庭の切ない日常が胸に染みしてくる。

一方で、ビジネス世界での活躍ぶりは目覚ましい。独立後は、銀行が納得して資金を貸し出せるよう、企業のビジネスモデルをブラッシュアップし、事業計画書を一緒に作り上げるといふ新たな事業を軌道に乗せた。本書には「心底やりたい仕事をやる」という夢の実現方法が丁寧に表現されているが、同時に銀行と企業の橋渡しをするという、日本経済の活性化にとって、より意味のある活動が見えてくる。銀行と企業の意味疎通についてのヒントとアイデアがたっぷり描かれている。

またなにより感心したのは、その人生哲学だ。決して人に求めず、相手のことを第一に考え、人の縁を大切にする。その特別なコミュニケーション能力は、恐らくこれらの日本人の生き方に一石を投じるものだと、私は思う。